

◆ 平成27年度 活動報告シート ◆

団体名：ファーム・インさぎ山

代表者：萩原さとみ

URL：<http://farmin-sagiyama.com>

1. 活動が必要とされた状況



当団体の田んぼ体験の場である水田地域は見沼田んぼと呼ばれ、もとは沼であった地帯であり、江戸時代による干拓事業によって田んぼができるようになったという歴史を持つ。

元が沼地帯であったため一度雨が降れば一週間は田んぼに入れないなど活動の延期、中止に悩まされていた。田んぼ体験事業における活動は基本的にすべて手作業であるため、稲刈りの中止は多大なる肉体的、精神的負担がかかっていた。

加えて近年の天候不順による多雨、残暑に悩まされ続け、活動の縮小も考えた時期もあった。特に残暑によって不参加率、体調不良者数は増加し懸念は増すばかりであった。

これを改めるには最低限の機械化を導入し参加者に適度な体験をしてもらい、また主催者側としては万一中止に対応できるようバインダーの設備が切実となった。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

9月～10月にかけて田んぼ体験による稲刈りを実施した。今回助成申請したバインダーは主に稲刈り体験の前、後という形で使用した。まず事前の圃場整備として体験参加者が入りやすいように、そして稲刈り量の軽減のため、稲の周囲を3～5周し刈り取る。また中止後の稲刈り作業に使用した。



昨今は首都圏地域からのアクセスの良さから田んぼ体験活動の需要があり、幼稚園、保育園、小学校、中学校、専門学校生、大学生、社会人と多くの人に参加している。

3. 活動の成果

作業量の増加に伴う怪我の心配は常にあったが今回は体力的、精神的にも余裕を持って終えることができた。また稲刈り時の雨も多くやはり中止が数回でてしまったが、バインダーの導入によって今回は慌てることなく主催者、体験者共に「ちょうどよく」終わることができた。



一番の成果としては活動を継続できることである。農家を主体とする当団体が耕作を放棄することは土地の荒廃化と同義となる。地域コミュニティと連動することにより単体では肉体的に厳しい、土水路の整備や畦作りが可能となり見沼の特性である半湿地帯を生息地とした生き物を守ることができ維持することができる。

4. 今後に残された課題

持続的な活動にあたり動植物との「共生」という視点から農家として健全な生産に努めなければならない。また隣接の放棄地、そして里山の荒廃化を解消し、かつて「野田の鷺山」であった環境へと見沼の保全に繋げていかななくてはならない。また更なる都市住民との交流をもってその理解の醸成、視覚化、情報化を通して活動を促進させていく。